

## アトモスフィア

## 研究者渡世春秋

田 辺 忠\*

有機合成化学領域から生化学領域に研究分野を移し、早石、沼、静田3先達の手ほどきを受け、京都大学医学部医化学教室で研究を始めて早30年の歳月が流れた。あれだけ生化学分野の実験に時間を投入したにもかかわらず、依然気持ちは有機化学者のままで、すぐにでも不斉合成屋に戻れそうな錯覚に陥る。30歳までの技術しか身に付かないのであろうか。一方、研究は百報を越えたが未完成で、恩師の先生方の業績には質量ともに遠く及ばない。まこと、ヒポクラテスの箴言のはじめに書かれている通り、「人生は短く、術のみちは長い。機会は逸し易く、試みは失敗すること多く……」(大槻真一郎編、ヒポクラテス全集)である。若い研究者の皆さんは、今のうちに一流の実験技術を身につけておいていただきたい。

日常に流されていると、日々の変化はわずかでも、振り返ってみると30年間には大きな変化があった。研究室では、反応キットの中身を敢えて知ろうとはしないし、緩衝液が無くなっただけで新しいキットを買わねばならない。混入が問題ない実験でも滅菌したディスポのピペットを使って液を分注し環境破壊に手を貸しているし、自分のピペットマンの操作精度を知らずに微量の反応液を分注し、3桁の有効数字が出る実験は名人芸に近いはずなのに、結果はパソコンが計算してくれるから十桁近くのデータが出てしまう。生化学実験技術の普遍化と定性的な研究が多くなったためであろうか。

また、研究の主流は化学的な要素が希薄になったのと引き替えに、生物学的な要素が増し生化学から生物化学へと変貌したように感じる。薬理学分野の教授に元生化学者の数が増していることから推察可能なように、生命科学系研究領域の境界が希薄になってしまった。それとは逆に、ポストゲノム時代に入り昔蛋白科学と呼ばれた領域は新しい衣を纏いプロテオームと称せられ、また日が当たったかのように見えるが往年のすばらしい研究技術は限られた研究室にしか見あたらない。また振り出しに戻って、技術を磨き直すのであろうか、それとも定量的な実験には戻らないのであろうか。

研究評価も様変わりして、昔最高の雑誌に掲載された過去の優れた論文が、今では特別高くない最近のインパクト・ファクターで評価されるようになってきている。研究環境も変わりつつあり、博士が量産されるようになったが、正規職員の定員は昔のままで、今度はオーバードクターならぬオーバーポスドクの時代が訪れようとしている。量産のためか博士取得者の質も幅が大きくなり、選択される時代が訪れようとしている。さらに、国研の正規職員になっても、60歳定年で再任用制度の適用や失業保険もなく、雀の涙ほどの年金で世の荒波に突き落とされる時代が訪れた。研究者も貧しく清く美しくは生きられなくなり、自立した人生設計に基づいた生き方を模索せねばならない時代が到来した。

分け入っても分け入っても青い山

山頭火

\*国立循環器病センター研究所薬理部・大阪大学医学部連携大学院